

Title	Duden文法の「基本文型」について：外国語としてのドイツ語の学習への応用の可能性
Author(s)	乙政, 潤
Citation	大阪外国語大学学報. 17 p.175-p.187
Issue Date	1967-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80282
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Duden 文法の「基本文型」について

—外国語としてのドイツ語の学習への応用の可能性—

乙 政 潤

Über „Grundformen der Sätze“ der Duden-Grammatik

—Zu ihrer Benutzung beim Deutschunterricht als
Fremdsprachenunterricht—

Jun Otomasa

Knrze Inhaltsangabe

Hier sind zwei Fragen in Bezug auf die „Grundformen der Sätze“ der Duden-Grammatik behandelt und beantwortet, und zwar in Hinsicht auf den Unterricht der deutschen Sprache als einer Fremdsprache. Nämlich

1. Kann man die Grundformen beim Unterricht besonders für die Übungen erfolgreich benutzen ?

2. Sind sie dabei die Maßstäbe, wenn man diese Übungen nach Schwierigkeitsgraden in Stufen gliedern will ?

Sie sind syntaktische Grundformen, nach deren Muster der Sprechende die von ihm wahrgenommenen besonderen Wirklichkeiten so zu „setzen“ vermag, daß der Hörende die Setzung nachvollziehen kann. Und jede Sprache besitzt bis zu einem Grade ihre eigenen Grundformen. Daher ist es zu empfehlen, daß jeder, der Deutsch als eine Fremdsprache lernen will, die der deutschen Sprache eigenen Grundformen kennenlernt. Aber sie zeigen nur die abstrakten Aufbauschemata deutscher Sätze. Mit diesen Kenntnissen der Grundformen kann man also nur den Aufbau eines deutschen Satzes analysieren und verstehen, man kann jedoch nie einen wirklichen Satz bilden. Denn die sprachliche Gestaltung eines Sachverhalts

durch das Mittel der Satzgliederung erfolgt zuerst nach sachlichen Gesichtspunkten, und dann wird auf dieser Grundlage der Sachverhalt nach der inhaltlichen Bedeutsamkeit unterschieden.

Also muß man immer in der Form eines Satzes die Grundform lernen. Hier spielen die Grundformen ihre eigentliche Rolle. Denn man spricht in diesem Falle genau so, wie das Mitglied der deutschen Sprachgemeinschaft das tut. Und es ist für den Deutschunterricht wünschenswert, daß man in dieser Weise die deutsche Sprache lernt. Hieraus ergibt sich die Notwendigkeit, daß man für den Deutschunterricht Satzübungen bilde, die nach solchen Grundformen gegliedert sind.

Aber die Grundformen sind wegen ihres abstrakten Charakters nicht fähig, diese Übungen nach ihren Schwierigkeitsgraden in Stufen zu gliedern. Die Gliederung wird von den grammatischen Regeln entschieden, die in diesen Übungen gebraucht werden. Und es ist deshalb zu fordern, daß diese Abstufung nicht aus dem Vergleich mit unserer Muttersprache, sondern aus den Schwierigkeitsgraden der deutschen Sprache selbst erarbeitet wird.

昭和38年度から39年度にかけて、私は本学のドイツ語学科1回生にLLを用いて授業するために特別の教材を作った。そしてそれを用いて昭和39年度と40年度の授業を行った。この教材の詳細は本学学報15号に記したとおりである。その基本的特徴は、第一に、Duden文法の云うドイツ語の基本文型を毎授業時一文型ずつ教えようとしたこと、第二に、基本文型と同時に文法的事項をあわせて教えようとしたこと、第三に、文型と文法的事項に関して同種の文を集めそれらを学習者に連続的に与えることによって、この二者を体得させようとしたことである。つまりそれは外見上いわゆるパタン・プラクティス (Pattern Practice) と似ていた。

この教材を2年間使って見た結果、私はいろいろな不満をこの教材に感じ始めた。その不満は一部には勿論練習形式や盛られた文法的事項の選択や語彙などに関する具体的なものであるが、大方はこの教材の作製の原理が理論的に十分検討され尽されたかという反省から来る根本的なものである。第一の反省は、LLでの練習が文形式であることは妥当かどうか、ということであった。この問いに対しては前号で省察を加えた。答えは「而り」である。但し、この返事は口頭練習の根本的原理を指示しているのであって、文型反覆練習以外の練習を口頭練習から閉め出そうとするものではない。例えば、文の抑揚や旋律を教えたり、聞き取りの練習を行ったりすることも口頭練習であり、その際にも出来る限り文の形式を用いることが合理的であるという意味である。云うまでもなく、文の形式によらないLL練習も又場合によっては可能であるばかりでなく

正当であることすらある。例えば、発音矯正のためにLLを利用する場合である。すると、私の作った教材が文形式の練習に終止しているのは一応妥当であると云い切れるにしても、「文型」をその教授目標にしていることは適切であろうか。これが第二の反省である。実際に使った「文型」がDuden文法の基本文型である以上、この問いは次のように云い換えてもよからう。Duden文法の基本文型を教えることがドイツ語学習の能率を高めるであろうか。Duden文法の基本文型を理解していることはドイツ語を実際に用いる上で有利であろうか。更に又第三の反省として、教材を構成するのに基本文型を基準にしたことについても、次のように問わねばならない。即ち、Duden文法の基本文型をLLでの口頭文型練習の提示順序を作る上での決定する基準に用いることは適切であろうか。或は、それは指針となり得るであろうか。

Duden文法は、ある一つの任意のドイツ語の文章からその意味にとって必要不可欠とは云えない要素を取り去ることによりドイツ語の基本文型が認知出来ると云って、その実例を挙げている。そしてそれに先立って、Duden文法の想定する基本文型の観念をこう記している。

それぞれの言語にはシンタクス上の有限数の基本型というものがあるものだ。話者はこの基本文型というお手本があるので、自分が知覚した現実をこの手本に従って「定める」ことが出来るのである。それだから聞き手は聞き手で、話者がこうして「定めた」ものをそのとおりに後から認めることが出来るのである。(Jede Sprache besitzt eine überschaubare Zahl syntaktischer Grundformen, nach deren Muster der Sprechende die von ihm wahrgenommenen besonderen Wirklichkeiten so zu „setzen“ vermag, daß der Hörende die Setzung nachvollziehen kann.)¹

最初に「それぞれの言語には」と述べているのは、Duden文法が他のいかなる外国語でもなくドイツ語をその対象として扱おうとしているからである。従来、ヨーロッパの言語全般に通用するような文法的構造が存在し、ドイツ語にも又この文法的構造があてはまるものと考えられて来た。ドイツ語の学校文法がラテン語文法をお手本にして作られたのは、このような考えをふんま

¹ Der Große Duden Bd. 4, Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, 1. Aufl. 1959, S. 434, Zif. 859

えてのことである。そして、このような文法は往々ドイツ語の慣用を無視したり、図式的であったりした。ところが、G. Schmidt-Rohr, G. Ipsen, W. Porzig, J. Trier, L. Weisgerberらの新しい見解によると、言語一般なるものは存在しないのである。存在しているのは現実の個々の言語つまり母国語 (die Muttersprache) でしかないのである。たしかに、我々の生活の中に普遍的な言語なるものは決して現われない。我々が知っているのは、具体的な母国語という言語の形である。特に1930年代以降、ドイツ語に関する研究が進んで、言語の本質に関する見解もドイツ語の構成についての考えも根本的に変った。新版のDuden 文法は、出版社や編集者 Paul Grebe が序文で述べているように、この変化に対応した規範的なドイツ語文法を世に 送る目的で編集されたものである。

ドイツ語の文章からその意味にとって 必要不可欠であるとは云えない要素を消し去ると、どの文章についても次のことが共通である。即ち、どの文章も「或るもの」の名を挙げており、且つ、その名を挙げられた「或るもの」が時間的にどのような経過を辿るかを述べている。知覚されたある特定の現実を分解して、このように「或るもの」とそれについての「陳述」という形にすることがドイツ語の文章には特有なのである。そしてこの「陳述」が形づくられて始めて、言語はある存在なり出来事なりの全貌をその言語特有の 見方の下に捉えることが出来ると云うべきであろう。その意味で Duden文法は、文章論が何よりもまず扱うべきなのは「陳述」に刻印されたその言語特有のこの見方であるとしている。¹

これらの「陳述」を手がかりにすれば、ドイツ語が世界の中の存在なり出来事なりを精神的にどのように掴み取ったかが判る。(An ihnen erkennen wir am deutlichsten den geistigen Zugriff unserer Muttersprache gegenüber dem Sein und Geschehen in der Welt.)¹

ここにおいて、Duden 文法がその基本文型を設定した 意図は明らかである。Duden 文法はそれでいて、ドイツ語固有の世界把握の結果を明らかにしようとしている。そして、これは長い長い期間にわたって形式と内容と云う両立から生れたドイツ語の根本的構造である。勿論、この根本的構造は文型に限らずドイツ語全体にわたるものである。この構造を明らかにし、人々の意識に上らせることが文法の新しい任務である。² この新しい任務を帯びた文法は「内容に関連させられ

¹ Der Große Duden Bd. 4, Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, 1. Aufl. 1959, S. 434, Zif. 861

² ibd. 編集者の序文。

た文法」(„Inhaltbezogene Grammatik“)と呼ばれる。¹ 但し、Duden 文法はこの新しい文法の見解を必ずしも全面的に採り入れたわけではない。編集者の P. Grebe は、この研究方向の見解はまだ完成したものではないと考え、その研究成果のうち確実と見做され得るものだけを採り入れたと云う。²

Duden 文法は「陳述」を観察して、それが動詞の文肢だけで成り立つ場合と、動詞の文肢とそれの意味を補うものとで成り立つ場合とに大分し、更に後者の場合について、意味を補うものが一つで足りる場合と、二つ以上必要である場合とに分けている。そしてそれらの「陳述」の中の動詞の文肢は文法的には「核」をなすと Duden 文法は云う。³ この「文法的には」という断りこそ、実は Duden 文法の基本文型の機能に関する考えを暗示するものである。主語と述語という分類や格づけは純粹に形式的なものである。主語と述語とが文の要素として分類上第一級に属することが必ずしも、それらが「言」(Rede)の意味(Sinn)に対して持っている重要性も第一級であることを意味している訳ではない。そして、最下級に分類される規定語句といえども「言」の意味にとって最も重要であり得る。つまり、ある事実を文章を用いて言語の形に変える時は、それはまず事実⁴に即して行われるが、これを基礎として内容の重要性に応じて、例えば強調なり配語なりによって、変形が加えられるということである。そしてこのことは又自明のことであるとも云えよう。なぜならば、もし話し手が対象に対する自分の注意が移り変わるままに文を作っていたとしたら、出来上って来るものは印象の目まぐるしい羅列になってしまい、客体の世界のある程度の確実性さえも捉えられずに終るからである。話者はまず文型を選択しこれの各文肢に語をはめ込む。但し、その文型は母国語共同体から一方的に与えられたものである。又、語はある意味範圍(Sinnbezirk)⁴から選ばれるが、それはシNTAX上の語野(syntaktisches Feld)⁵が許すも

¹ Der große Duden Bd. 4, Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, 1. Aufl. 1959, 編集者の序文。L. Weisgerber によって提唱された言語研究の新しい方向。名称も又彼によるらしい。(L. Weisgerber, Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen, 1. Aufl. 1963, S.63, Bemerk. 1)

学問としての文法は感覚的に捉え得る言語の構造を熟知しようとするところから始まった。彼はこれを「外形に関連させられた文法」(„Gestaltbezogene Grammatik“)と呼ぶ。彼によれば、この方向の研究は既に尽くされた。それにも拘らず言語の精神的な面の研究はまだ十分ではない。言語の精神的な面はまずはこの文法によって我々の意識に上るものである。これを彼は「言語内容」(Sprachinhalt)と呼ぶ。それで、「外形に関連させられた」研究の次に来る新段階は、「内容」を抛りどころとした研究である。そしてこの研究の前提となるのは「内容に関連させられた文法」(„Inhaltbezogene Grammatik“)である。

なお彼は、言語をこのように静的に観察することに留まらず、energeiaとしての言語を観察するための続く二段階を想定している。一つは言語手段が持つ精神的な働き(Leistung)を見通そうとするものであり、もう一つは更に言語が社会生活の中で及ぼす作用(Wirkung)を発見しようとするものである。(ibd. S. 16)

² ibd. 同じく Grebe の序文。

³ ibd. S. 434, Zif. 862

⁴ ibd. S. 415, Zif. 835 ff.

⁵ ibd. S. 423, Zif. 842

「」に限る。「もとより、上述の二段階がドイツ語共同体に属する話し手にも聞き手にも意識されないことは言うまでもない。一方、「核をなす」という言い方にも又意味がある。それは、「陳述」自体の分析が動詞の充当される文肢の意味を手がかりとして行われており、「陳述」の型の分類はその分析の結果に基いてなされていることである。従って、それぞれの基本文型にはその文型に応じた一つの動詞領域 (Verbalbereich)¹ が属していることになる。ともあれ、文型という以上は当然のことながら、Duden 文法の基本文型も抽象的なものである。そこで、話者の個人的具体的な言語活動は、基本文型の各文肢に語をはめ込むことに留まらずに次のような手段によって行われることになる。即ち、Duden 文法が挙げているのは、文型に後からつけ加えられて文の意味にとって必要不可欠ではない文肢、附加語、文肢に代る部分文章、語順、文の旋律である。²

以上が Duden 文法の基本文型の根本的特徴である。Duden 文法が編集されたのは、広い意味での新高ドイツ語の文語を育成するという Duden 編集部の意図が文法の領域で実践された結果である。それは旧版の Duden 文法の編者 Konrad Duden の努力を引き継いだものである。³ Grebe は新版の序文でこの文法を「国民の文法」(Volksgrammatik) と呼んだ。このことは、以下に外国語としてのドイツ語の学習に対して基本文型が持つ意義を考察するに当り、特に銘記すべきことであると思われる。なぜならば、Duden 文法がドイツ語共同体の構成員のために編まれたということとは既に、それが日本人が外国語としてのドイツ語を学ぶことを助ける文法とは一線を画するものであることを意味しているからである。従って、基本文型についても同じことが云えるからである。ちなみに、この基本文型の設定の動機は、既に見た如く、ドイツ語文の「陳述」部を分析してドイツ語の世界把握の型を抽出することであって、ドイツ語学習を容易にする意図には関係がない。その他に、編集者が云うように Duden 文法は、部分的にいわゆる „Inhaltbezogene Grammatik“ を採り入れたとはいえ、多くの点でなお伝統的文法の認識を受け継いでいることも又十分顧慮されるべきであろう。つまりそれは、例えば C. フリーズが「外国語としての英語の教授と学習」⁴ で示したような記述では勿論あり得ない、ということだからである。さきに観察したような Duden 文法の根本的特徴と、基本文型がそこから由来する文法自体に関する上述の二つの

¹ Der Große Duden Bd. 4, Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, 1. Aufl. 1959, S. 460, Zif. 954

² ibd. S. 465, Zif. 965

³ ibd. 出版社の序文。

⁴ C. Fries, Teaching and Learning English as a Foreign Language, 1945

認識は、これらの基本文型を 外国語としてのドイツ語の教授に利用する 可能性の範囲に限定を加えるものである。

既に見たように、Duden 文法の基本文型とはドイツ語が世界を把握する仕方 のことである。そしてそれは、たとえ話者にも聞き手にも意識されないとはいえ、 個人的言語活動の基礎をなすものである。個人は彼の言語活動を行う際に常に基本文型に従ってそれを行っている。 というよりもそれに従わざるを得ない。それほど重要な事柄について、 ドイツ語共同体の外部にあってドイツ語を習得しようとする者が知識を持っていることは、一般的に云って少くとも 無意味ではあるまい。 もっとも、基本文型を知っていればドイツ語を使う際にそれが助けになるかどうかは、甚だ疑わしい。 先に見たように、この文型は抽出されたものだからである。ドイツ語共同体に属する者は彼の個人的言語活動に当り、この各文肢にシンタクスの的に許される 語を当てはめることから始めて、既に名を挙げたような手段を用いることによって、文型を実地に 使用するのである。そして、ドイツ語を学習する者の第一の目的がドイツ語を実地に使えるようになることであるならば、彼の学習の本来の対象はこれらの手順や手段の用い方であるはずである。だから、既に習得したドイツ語文を分析して理解しようとする際にこれらの 文型を適用するならば、それは有効な使い方と云えようが、話すことによってであれ書くことによってであれ実際に ドイツ語で陳述をなす場合には基本文型は助けにならない。 ついで乍ら、ここで「書く」と云うのは、逐語的に訳して行くいわゆる「作文」ではなくて、自分が喋ることを自分で 筆記するが如き能力を指しているのである。さて、例えば、ドイツ語においては語の位置や配列はしばしば非恣意的であり且つ重要な意味を持っているが、基本文型はそのことについては 学習者に何も教えてくれないのである。Dudeu 文法は語順を、個人が言語活動に文型を利用する手段の中へ 含めてしまった。又、文の旋律についても同様である。文型を知っていても、それはドイツ語で陳述をなすことを 助けないのである。

すると、基本文型がドイツ語で陳述をなすことを助けない以上それは学習には不要である、と結論出来るであろうか。

学習者はドイツ語で陳述をなすに当って、文型の他に文型を個人的言語活動 のために用いるべき手段をも知っていなければならないことになる。この条件を満すものはとりもなおさず 具体的な文である。具体的な文の形によること以外には、ドイツ語を用いて陳述をなすことに習熟することは達成し難い。具体的な文を用いて能率的な学習をしようと思えば、それは文型を同じくし

且つその文型を個人的言語活動に応用すべき 手段をも シンタクス上同じくするような 文に多く触れることが適当な方法であろう。ここに文型練習を学習に用いるべき必然性が生じる。即ち、例えば主語と述語と様態の意味を補うもの (Artergänzung) と前置詞つき目的語 (Präpositionalobjekt) から成る文型について次のような練習問題を作ることである。

Der Ingenieur ist mit dem Arzt bekannt.
Ist auch der Tischler mit dem Arzt bekannt?
Ja, auch er ist mit dem Arzt bekannt.
Der Kaufmann ist mit der Bedingung zufrieden.
Ist auch der Bauer mit der Bedingung zufrieden?
Ja, auch er ist mit der Bedingung zufrieden.
.....

学習者は最初の文を聞いて模倣し、次の問いを聞いて返事をするのである。これらの練習が書かれた形で行われるよりもまずは口頭で行われることが望ましい理由は、前号の拙論で考察したとおりである。¹ 又、これらの練習が口頭で行われる場合、各問題にはそれぞれに具体的状況が欠けているために「言」とはなり得ず、そのために学習者は真の意味では「話し」ていないうらみがある。このことは学報15号や木曜会々誌1965年号で指摘した。² 又、このような形式の練習はいわゆるパタン・プラクティス(Pattern Practice) と似ている。しかし、本質的には異なる。パタン・プラクティスはオーラル・アプローチ(Oral Approach) の考え方に基づいた一連の段階的指導技術のうちの一つである。オーラル・アプローチの場合、学習者が既習の文型や語彙などを使って学習者同志で対話することが学習の最終目標である。ここに至るまでに、学習者に新しい教材を提示するために教授者が学習者に質問し答えさせる段階と、導入された新しい事項を集中的に練習させる段階とがある。パタン・プラクティスは後者の指導技術である。従って単独で行われる練習ではない。又、その内容は最終目標である学習者同志の対話の内容によって決められるのである。その他に、パタン・プラクティスは文の形で行われるけれども、必ずしも文型だけがその練習の対象であるとは限らないのである。

¹ 大阪外国語大学学報16, 1966, p. 253 ff. : 「外国語教授に対する口頭練習の意義について」

² 大阪外国語大学学報15, 1965, p. 157 ff. : 「LLによる外国語教授の試み——ドイツ語初歩課程の場合——」 3. 4. 大阪外国語大学木曜会会誌1965, p. 14 ff. 「LLについて (2)」 2.

それはさておき、こうした練習形式について又しても「果して文型は口頭変形が流暢に行われるようになることを促進するだろうか」という疑いが生じる。そしてそれは尤もである。練習が十分に行われれば、学習者は申し分なく流暢に口頭変形を行うことが出来るようになるであろう。けれども、基本文型を了解していることが口頭練習を容易にしているとは思われない。むしろ学習者はこのような口頭変形を自動の域にまで高めた時始めて、練習問題の基本文型は *Japan ist an Eisenerz arm.* という文の基本文型と共通であるということをよりよく了解するのである。つまり現実には、変形の自動化こそ文型了解の前提なのである。そして注意すべきことは、口頭変形が完全に自動化し、練習問題に共通の文型を了解した場合ですら、基本文型は学習者のドイツ語に関する知識の一つに留まり、依然として学習者のドイツ語運用能力とは別のものであることである。しかし乍ら、この練習は重要なことを意味している。練習に於て学習者は文型に従って陳述を行った。即ち、ここに於て基本文型はその本来の任務を果たしたということである。既に見た如く、ドイツ語共同体の話者はすべてこの文型に従って陳述を行う。外国語としてドイツ語を学習する者がその点で彼に近づこうとすることは、無論望ましいことである。そして、基本文型はそうすることの手がかりとなるのであるから、外国語としてのドイツ語の学習にとって基本文型は有用であると云うべきである。

ところが、基本文型を基準として先に例を挙げたような練習問題を作ろうとする時に、基本文型の抽象性の故に次のような不都合が生じる。即ち、互に文型の異なる文を配列しようとする時、基本文型だけではその順序は決定出来ない。主語と述語と四格目的語とから成る文型と主語と述語と三格目的語とから成る文型との間に難易の差を認めることは不可能である。又、主語と述語とのみから成り且つ意味を補うものを必要としない文型を持つ文が、主語と述語と二つの意味補充とから成る文型を持つ文よりも簡単であるとは必ずしも云えない。又、同一基本文型を持つ種々の文について、それらのうちどれとどれが学習上—そう重要でありどれとどれが比較的重要でないかを定めるものは文型ではあり得ない。

基本文型の抽象性が齊すこのような困難を解決する手がかりを与えるのは、具体的な文に現われている文型活用のための手段の一切——文型の各文肢に充当される語や、文型に後から加えられ、文の意味にとって必要不可欠とは云えない文肢や、附加語、文肢に代る部分文章、語順や文の旋律——などに関する文法的規則である。これらの文法的規則の外国語としての難易が、即ち易から難への文法的規則の配列が、文型の配列や練習のための文分類を決定するのである。それ

は、オーラル・アプローチが外国語学習者の母国語を「科学的に記述して、それに基づいて学習外国語の音組織や文構造などに関する教材を配列しようとする態度とは全く異っている。又このことは、そもそも Duden 文法そのものがドイツ語を「体系としての言語」(language as code)として、しかもドイツ語共同体の構成員のために記述された¹ことを考えれば、当然の相違であると云わねばなるまい。

以上により、外国語としてのドイツ語を学ぶ者に Duden 文法の基本文型を教えることは、それが文型反覆練習という形で行われる限り、学習にとって積極的な意味で有益である。そして、その場合に学習者がドイツ語共同体以外のいかなる言語共同体に属していても、それは問題にならない。又、文型反覆練習を作製するに際しては、基本文型はそれだけでは十分な尺度となり得ないと言うべきである。

なお、ドイツ語の文型を論じたり分類を試みたりすることは、本論で扱った「基本文型」の P. Grebe の外に何人かのドイツ人の学者によって既に行われている。²しかし、残念乍らそれらの人々の説について詳しく知らないので、彼等の唱える文型と「基本文型」とを比較して論じることが出来なかった。

補遺「母国語」について

新版の Duden 文法では「母国語」という観念がその重要な背景をなしている。Duden 文法は自

¹ P. Die Klanggestalt des Satzes の冒頭にはこう記してある。「ここで我々は言語 (Sprache) から言語活動 (Sprechen) への境い目に立っている。つまり、伝承された言語共同体の遺産である『ドイツ語』が個人に課している束縛から、個人がこれを用いるために許されている自由への境い目に立っている。前者の束縛は個人があまねく理解されるためのものであり、後者の自由は個人のどんな陳述の必要にも表現を許すためのものである。……」Der Große Duden Bd. 4, Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, 1. Aufl., 1959, S. 600, Zif. 1253

² 例えば, H. Brinkmann, E. Drach, J. Erben, H. Glinz, L. Weisgerber.

分の任務は「母国語」の文法となることだと考えている。それ故、Duden 文法の 基本文型について考察を試みる場合にも、この「母国語」の観念についてよく理解していることが大切だと思われる。そこで、Porzig と Weisgerber のいくつかの書物から私が「母国語」について理解した事柄を、次の二点についてまとめて見た。第一に、彼等にとって「母国語」は何を意味しているか。第二に、どういう根拠から彼等は特に「母国語」を採り上げるのか。このまとめを本文に入れなかったのは、そうすることで本文の論旨が中断されることを恐れたからである。

一群の人間が対話によって意志疎通出来るためには、その集団に属する者は皆等しく、刺戟としての特定の言表に対しては反応として特定の態度をとることがまず必須である。そして、互に話すことが出来る人間たちに共通しているのは、実は非常に多くのこうした反応の仕方を何時なりとも即座に用い得るという姿勢である。対話が可能なのはかかる条件が満された場合に限る。つまり上述のような姿勢、簡単に言えば言語を所有していることが対話の前提条件である。換言すれば、言語共同体 (Sprachgemeinschaft)こそ対話の前提である。ところで、刺戟としての特定の言表と反応としての特定の態度との関係は各言語共同体の内部でのみ通用する恣意的なものである。そして、その共同体内の各人はこの刺戟の形式を一々習い覚えなければならない。蜜蜂にも「言語」と呼び得るものが存在すると云うが、¹ 蜜蜂の「言語」能力は遺伝され得るばかりでなくすべての蜜蜂に通用するものである。ところが、人間の言語と蜜蜂の「言語」との相違はそれだけに留まらない。蜜蜂の「言語」の表現は固定的である。それが変化するとしたら、その変化は蜜蜂全体に一様に亘るはずであり、しかも蜜蜂自身が突然変異とか自然淘汰とかによって変化する場合に限る。人間の言語の場合にはその表現は蜜蜂の場合のように固定的ではない。話し手は表現を恣意的に変化させ得る。彼の言語共同体の中でこの変化が容認さえされればよい。このような変化はその当座は極く僅かなものであろう。そして個人はその変化には恐らく気がつかないであろう。しかし言語共同体が幾世代かを経る時、変化は積って大きくなり、言語自体を顕著に変化させる。蜜蜂の「言語」が、例えば餌を探すような、彼等の日常生活の直接的な必要にのみ限られているのに反し、人間の言語は、始原の状態では蜜蜂と同様の必要から出発したとはいえそのような領域に留まらずどんどんと間口を拡げて、ついには人間が世界を認識する手段となり人間の共同体の基盤にまでなったのである。たしかに、言語はいかなる宗教的確信や信仰よりも強く人間を結合させ、同時に逆に同程度に人間をその枠の内に拘束している。人間の言語が日常生活における意志疎通の手段に留まらなかったのは、それが上述のような微少な変化を積み重ね

¹ W. Porzig, Das Wunder der Sprache, 2. Aufl. 1957, S. 51 ff.

て来たからである。云い換えれば、人間の言語がその背後に歴史を持っているからである。そして、人間の言語が歴史を持っているのは、そこでは蜜蜂の場合と異って、一切の刺戟に対してどう反応しどう振舞うかは先天的に決められたものではなく、全く自由だからである。このように歴史を持っていることと自由であることとのために、人間は全人類に共通の言語共同体というものを作ることは出来なかった。逆に、多数の言語共同体が成立し、それらが互に意志を疎通することは困難となった。しかし、人間の言語が歴史を持ち且つ自由であるということは、それが人間の精神活動の所産であるということである。従って、母国語の存在は人間の言語が文化財であることの証左なのである。

文化財としての母国語というものを考える以上、母国語については必然的に次のことが問われる。即ち、母国語は言語共同体の文化の中でどのような位置を占めるのであろうか。或は、文化に対してどのような影響を及ぼしているのであろうか。Grebe が Duden 文法の序文で名を挙げている学者たちが、言語一般なるものの存在を否定して「母国語」を特に強調するのは、現実には「母国語」の群しか存在しないからというだけではない。彼等が研究しようとしている言語と文化との間の相互影響、特に言語の文化に対する影響は、母国語とその言語共同体の文化との関係という具体的な形でしか捉えられないからである。勿論、この問いは言語一般と文化一般との関係という形に普遍化されることは出来よう。しかし、そうするためにはその前にまず母国語とそれの文化との関係が必ず理解されていなければならない。その上、言語の言語共同体に対する関係という時には、母国語の母国語共同体に対する関係こそ決定的だからである。言語をこのような面から考察しようという態度は Herder から始まった。¹ 彼は言語を理想言語 (Idealsprache) という物差では測らず、言語は自然に成長した一回きりのものであると見做した。そういう言語の豊かさを把握することを考えた。又彼は、各国語こそそれを使用する国民の全思想財を蔵っている倉庫であると考えた。こうして彼は、冒頭に述べた意味での「母国語」を発見し、言語研究の進むべき道を指示したのであった。

言語と文化との相互関係、内至は相互の影響、又特に言語の文化に対する影響、を採上げる時には、特に次の三点が重視されている。² 即ち、言語はまず第一に、音と内容とで以て一つの全体を成すところの感覚的且つ精神的なものである。第二、にその本質は「作用する力」(energeia)

¹ L. Weisgerber, Die Muttersprache im Aufbau unserer Kultur, 2. erweiterte Aufl. 1957, S. 9 ff.

² ibd. S. 20 f.

である。第三に、あらゆる言語「使用」というものには母国語の持つ力の作用が含まれている。つまり言語「使用」とは、あらゆる生活領域における我々の行為に外的に附着しているものではなくて、言語によって条件づけられた行為であると考えるべきである。

言語共同体はそれに固有の世界像 (Weltbild) を持っている。¹ 言語共同体が自然的世界像を精神的に支配するためにそれを言語的世界像に変えた結果である。そして母国語を使用する者はその言語的世界像という基礎の上に立ってこの世界の中で振舞っている。つまり母国語を「使用」することは母国語によって条件づけられた行為である。又、それは母国語の言語的世界像が可視化されたものであり、言語的世界像の影響が具現したものである。だから、母国語の作用する力はこの特有の世界像を通して生活の全領域へ達する。今や言語共同体は、その構成員をして一切の行為や活動や振舞を言語的世界像に従ってなさせるような作用が充満し、且つ、組織づけられている場所となる。ところで、各言語共同体はあらゆる生活領域で、生活の齊す問題と対決する場合に母国語を用いている。だから、そこで行われる解決は母国語の言語的世界像の特徴を帯びている筈である。又逆に母国語は、生活領域の必要や条件によって干渉や影響を受ける結果、その構造の外延や傾向は何らかの制約を蒙っている筈である。従って、母国語についてのこのような現象を手がかりにすれば、母国語の言語的世界像の中でその特徴を刻み込まれ且つ *energeia* として保たれているものが、どのようにして得られるかを認識出来るであろう。そしてこの認識こそ文化の根底と特質とを洞察することを助けてくれる筈である。これが、母国語について母国語と文化との関係が特に採り上げられる理由である。

¹ L. Weisgerber, Vom Weltbild der deutschen Sprache, 1. Aufl. 1950, S. 23 ff.